

小田原俳句協会報

理事会だより (6・10)

一、令和3年度小田原文化の日俳句大会について、会長よりコロナ禍での同種の大会として先駆けの実施であり慎重な対応で準備をしよう、との発言があった。兼題は文化の日、賜(いづれも傍題可)、大会当日席題は秋季雑詠2句、選者特選賞選者は佃名誉会長、新井顧問、池田会長、みなみ・山北・青梅各グループ代表に決定。

第二部俳句大会は会場での食事不可に鑑み、受付開始を正午、投句締切を13時、開会を13時半とし、整理費を五百円に決定した。その他細目は事業部に一任した。(協会報10頁)

二、秋の吟行会(総務部担当)を小田原フラワーカーデンでの10月10日実施につき詳細を決定。(協会報10頁)

三、「俳句の岸辺」につき池田会長、編集委員会により2回の校正を行った旨山田編集委員長より報告。

四、みなみ俳句協会(加藤会長)より笛まつり俳句大会を中止するとの報告。

「俳句おだわら」10句抄 (646号より)

田中幸子 抄出

ふらここやハイジのやうに空を蹴り
啓蟄の体重軽く地球踏む
祝着をたたむ作法や花の昼
みどり児は指の先から春眠る
城濠をめぐりて夕の花筏
さくらさくらひとひらひとひら天の声
子ら眠り桜蕊降るまひるかな
菜の花や石垣山からどこへ飛ばう
伸びらかにパラグライダー夏来る

門松 鳳文
高橋 小糸
片野 節子
豊田 幸枝
神野美代子
岡本 史郎
須田 聡子
岩楯恵津子
近藤 絢子

齊藤 桂 抄出

花満ちてふと孤独なる卒寿かな
春炬燵同じ話を始めから
ゆるやかに航跡ほだけ春の海
置手紙めきてぶらんこ揺れ残る
風少し雨の少しを山桜
城濠をめぐりて夕の花筏
山笑ふ画室の広き南窓
行く春や土塊鳩のこもり鳴き
真夜の地震三寒のかたまりの中
垣結はぬ柚の暮しや雪柳

山崎 悦子
肥後ちさこ
吉田 康雄
池田 忠山
新井たか志
神野美代子
須田 晴美
大島美恵子
山田 照子
山口 千代

〈投稿〉

夏になれば エト・セトラ

長谷川きよ志

♪卯の花の匂う垣根に、時鳥早も来鳴きて、忍音も
らす、夏は来ぬ♪何とこの歌は明治の古き時代から長
い間、親しみ唱われてきた心に響く愛唱歌である。走
馬灯のように思い出が蘇ってくる夏、四季の中で私の
尤も好きな夏、その折々を詠んだ句を繙きながら来し
方を振り返ってみたい。

私は箱根湯本の須雲川の畔で生を受けた。

温泉地で生まれたので「温泉で産湯を使い…」と後
に就職した会社で、自己紹介の時に枕に使ったところ
何かと話題になったことに気を良くして、その後も挨
拶の度に常套句となった。生家の近くに源泉があり、
吸上げポンプから吹き出た温泉の香に包まれた中で幼
少期を過ごした。

湯けむりの沁む山肌や不如帰

緑深い山に囲まれた郷里を詠んだこの句は二十代後
半の作。会社の機関誌で高浜虚子に師事した「ホトト
ギス」同人の選者、深川正一郎の俳壇欄に投句してい
た頃の一句。当時は「俳句は年寄りの趣味」の概念が
強く、「未だ若いのに」の揶揄嘲弄する社内の反響は
複雑な思いで受け止めていた。

その箱根湯本は文化財、文学碑の多いことでも知ら

れている。小田原北条氏の菩提寺の「早雲寺」には、
室町時代の連歌師、飯尾宗祇（1421～1502）の
昭和8年に建立された珍しい笠を被った句碑がある。

世にふにかな

婦人八更丹しくれのやとり可奈 宗 祇

更に旧街道を上ると「正眼寺」に松尾芭蕉の句碑がある。

やま路きてなにやらゆかしすみれ草 松尾 芭蕉

又、湯本滝通りの老舗旅館「天成園」の中庭に玉簾
の滝があり、荻原井泉水（1884～1976）の句
碑がある。

瀧は玉だれ天女しらぶる琴を聞く 荻原井泉水

この玉簾の滝の前で、夏休みになるとラジオ体操の
行事があり、小学校六年間毎朝通った。滝の飛沫を浴
びながら体操が終ると、冷たい滝の水で洗顔して帰る
のが常で、心身共に引き締る得難い体験は懐かしい思
い出のひとつでもある。

そして毎年六月一日は待ちに待った須雲川の鮎解禁
日。

鮎釣のゆらゆら帰る薄暮かな 奥名 春江

滝通りの桜並木の雪洞に灯が点る頃、自慢の釣果を
下げて祖母の待つ家路を急いだ。「えらいまあ！たん

出して誉めてくれた。その祖母の言葉が嬉しく日の暮れる迄没頭したものだ。

扱、本格的に俳句を学んだ先師、藤田湘子の話題である。

湘子の生家は小田原の海の近くで、指導句会の度に実家に立ち寄り、ひと泳ぎしてから、未だ潮の香の漂う濡れた髪を拭き拭き句会に出て来る事もしばしばであった。

愛されずして沖遠く泳ぐなり

藤田 湘子

又、郷土愛も深く昭和48年刊行の「小田原市民俳句集」の第三集に、二十句を寄せている内の一句を抽く。

この眼いつまでからたちの花月夜

藤田 湘子

ところで、その後ご指導頂いた執先生とのご縁の始まりは半世紀前の昭和四十年代、小田原の小結社「音の会」で執先生も同じお仲間で、当時執先生は同人私は駆出しの新人であった。その頃の執先生作品を抜粋してみる。

朴散つて朴より昏きもののなし

黛

橋をゆく梅雨の男の弱味かな

黛

執 執

作風の違う二句を並べてみたとき、執先生の詩の基本である永久性、つまり「不易」。一方その時々の新

風の体「流行」。芭蕉の説く「不易流行」が見て取れて滋味深い。

その後の現在の「湯河原春のたより俳句大会」の前身、「湯河原椿まつり俳句大会」に参加するようになり、執先生始め北浦馨、ばら女ご夫妻、黒沢与作、朝妻春を、力石郷水さん等の湯河原勢と交流を深めた。時を隔てて平成11年、そんな縁もあり「春野」に入会した。何の前触れもなく入会したので電話でご挨拶をした。「あの時のきよ志さん？」と執先生。あの時つまり「音の会」以降の事を覚えていてくれたのだ。

その執先生は昨春秋、鬼籍に入られた。夏になれば執先生は現世に還ってきてくれるのか？次の古典が示唆している。

「行く河の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」

鎌倉時代の鴨長明著「方丈記」の冒頭部分である。そう執先生は流れ行く川の水に乗って、来世に召されてしまったのである。

遺影の父は…

何を言つてもあたたかな笑み返し

黛 まどか

あの執先生の慈愛に満ちた温かな笑顔にもう会えない。

俳句おだわら（6・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（5・28）

久江報

夏薊苳いきあふ峠口

足立 和子

親族の時に疎まし七変化

川本 育子

大揺れに雲かきまぜて今年竹

高橋 小糸

薄暑光背に港まで歩を進め

山崎 悦子

木道の足音それぞれ夏に入る

近藤 久江

◆春野（5・16）

きよ志報

見えすいた嘘も方便ラムネ飲む

尾崎 一夫

晶子の忌歩幅大きく歩きをり

二見 和江

賑やかな尼の法話や若葉風

内田知江子

ジャガ芋の花や赤子はひはひす

瀬戸 悠

山の子はなべて口下手河鹿笛

秋山 昇

薔薇の棘切つて悩みもどこへやら

伊藤はる子

昭和平成遊び尽くしてみどりの日

長谷川きよ志

◆みなみ（5・15）

かほる報

白藤の真ん中風が力抜く

市川めぐみ

禅院の法話の集い新茶汲む

斎藤 静

新茶摘む携帯ラジオ木の枝に

加藤 健治

母の日や目鼻が踊る似顔絵展

飯田 愛

雨蛙空を眺めて鳴く準備

小瀬村信子

米搗かぬ観光水車若葉風

新茶買う城下の町の老舗かな

柿若葉順序変われり回覧板

みどり児の湯を蹴る力柿若葉

田水張る早速富士がのぞき来る

◆零（6・17）

史郎報

万緑に光と陰と鳥の声

青木たけを

さくらんぼ笑い転げて食べおわる

伊藤 道郎

十葉や痰切飴はちと甘い

佐藤 正子

どくだみや我も花だよ群生す

井上 良子

葉の上が劇場であるかたつむり

木村 和彦

十葉咲いて讃美歌の聞こえる

中村 裕子

木道に靴音ひびき山開く

野川木一路

病める妻十葉摘んで深呼吸

岡本 史郎

◆沈丁（6・5）

寶子山報

梅雨湿地地蔵の顔に苔の髭

中野 文子

遠き日の旅寝の語ひ明易し

若村 京子

短夜や朝餉の粥をふきこぼし

柳澤ミサ子

生みたての玉子ふところ明易し

田中 恵一

短夜や光源氏の悔し泣き

河本 純子

紫陽花のやわらかき空模様かな

瀧本 敦子

十葉や白衣の天使エールする

勝木 澄子

加藤れい子

村上 龍山

加藤 富江

豊田 幸枝

加藤かほる

短夜や二センチ残るウイスキイ
短夜や夢に追われて目ざめけり
百幹の櫛くみさらさらと立夏かな
短夜やおかめ鸚哥に名を呼ばれ

◆香雨・梅ごち（5・23）

忠山報

菅野 英余
高井 幸子
片野 節子
寶子山京子

少しだけ濡れてもみたき若葉雨
夏つばめ教へ子のはや二児の母
夏めくや食器を白に取り替へて
大皿に藁の匂ひや初鰹

若葉風パスタソースにバジルの香

少年の皓齒まぶしき聖五月

若葉雨町も並木も新しき

養生訓を貼りなほし若葉寒

張りをへて田水にはやも動くもの

◆こよろぎ（6・10）

つとむ報

吉田 康雄
吉田 百代
門松 鳳文
池田 忠山
小澤 純子
板谷 雅泉
植松テル子
神山つとむ

雨の日のポストの上に蝸牛
球場の灯を煌々と枇杷太る
初がつを市場も人もいきいきと

◆青梅（6・9）

幸子報

大塚 行人
神野美代子
湯本とし子

柏餅お茶を汲み合ふ昼下り
姑の愚痴聞き流す術くちなし花
代田風水の匂ひに里ごころ

穏やかに今日の暮れゆく植田かな
土くれの鍬にほぐるる夏の入り
麦秋やシネマに残る原節子
報告で済ます弔ひ梅雨深し

◆おほる（6・9）

昌男報

加藤まり子
久保寺トミ子
田渕 令子
田中 幸子

太陽のきげん良き日の青田風
艶やかに濡れた花びら七変化
膝辺り揺れて誇示する小判草
小庭に花束紫陽花の一叢

雨と人待ち草臥れて七変化

晴れは鳥雨は蛙の予報聴き

雨上がり初夏の匂いの風となる

復旧の槌に遅速や虎が雨

朴葉鮮開ければ岐阜の山河かな

老鶯の一声湖の鎮もれる

墓を打つ雨音やまず桜桃忌

夏帽子唐松の道軽やかに

コロナ禍で心の整理衣替え

ワクチンが希望の光り梅は実に

柿若葉あかるい光り独り占め

◆たけのこ（6・9）

悦女報

宅配便届く夕べの青ぶどう

坂入清四郎
徳田 公子

校畑の水撒き教師腰手拭

三木 泰子

ふるさとは思わぬ景色代田満

久津間百合子

目こぼしの蕨の太し柔らかし

小宮 早苗

軽^{かる}鳧八羽急ぐ夕べの川伝ひ

宮崎 悦女

◆山北(5・27)

由里子報

校庭に仮設の校舎棕櫚の花

和田恵美子

万緑や手を引く笑みの退院日

尾崎 幸子

返り字にとまどっている走り梅雨

中山 妙子

人生にオアシスのあり木下閣

尾崎 竹詩

敷石のぐらつく稲荷苔の花

石田加津子

芍薬のつぼみ十一電話鳴る

竹下由里子

◆実のり(6・17)

たか志報

幼な児に夏帽翳す亡父^{ちち}のいて

岩本ひさみ

七曜の朝の光や七変化

杉本 久子

ジャケットに黴のレコード子は親に

木村 幸枝

梅雨蝶や妻はひらひら外出す

新井たか志

◆鷹(6・5)

十五報

ふらここに横顔恋のはじまりぬ

青木 孝子

雨余しづく弾きて枇杷の色深む

池田 令子

安房にあり海風頬に枇杷をもぐ

西賀 久實

青枇杷や振つて鳴りたる貯金箱

佐宗 欣二

国会のテレビ中継枇杷啜る

須田 晴美

寝返りの顔まぶしきや時鳥
溝浚ひ出でて隣の近くなる

中田 笑子
百川 秀子

玉葱を吊りて遅めの昼餉とる

山崎美知子

山深み九字に切り裂く滝の音

庄司 下載

下書きに終はれる遺書や杜鵑

瀬戸 りん

翼あるものを羨しとバナナ食ふ

高橋久美子

水はじく浅瀬の雀雲の峰

中山智津子

日覆の褪せて駅前ベーカー

齊藤 桂

作条にたまりし雨や鴉の子

芹澤 常子

母の通帳あづかる夜の金魚かな

畠 梅乃

馬鈴薯の芽をかき母を恋ふるかな

山口安規子

アイスキャンデー我はおかつぱ兄坊主

大木 敬子

上出来の粒餡父の日なりけり

大島美恵子

古井戸に織部の滑車半夏生

北崎 修

大降りの雨や実梅の粒揃ふ

田下 昌人

振り向きて住人顔の蜥蜴かな

中根 和子

初夏や子の研ぎくれし裁ち鋏

市川 好子

ゴミ置場にカラスバスター南風

加藤 幾代

人影の豆粒ほどや青田原

高橋 正子

森を射る光の筋や苔の花

守屋 まち

畑の菜を洗ふ浅井戸雲の峰

米山 翠

小さき駅出迎へありや百日紅

來田 新子

短夜やテレビを見つつストレッチ

大沢 年子

曇天の道退屈や大旱

片野 秋子

百姓と酒系受け継ぐ冷奴

小林 環

両の手のバケツ重たき旱かな

近藤 絢子

闊歩して青葉の匂う河原道

下平 美子

星涼しスワイプに懐かしき声

杉崎 せつ

青鷺の浅瀬の水を飲みにけり

関根 琉子

心字池梅の実落つる音したり

鳥海 壮六

時鳥文書く眼鏡休ませり

古屋 徳男

青鷺の動く刹那や取水堰

村場 十五

◆草むら(6・18)

重満報

下駄の音浴衣の女のしなやかさ

石井 秀稀

「今日の日を」と月下美人の楚々咲く

井上 和子

山椒魚プロペラ機なと昼寝ぢゅう

佃 悦夫

姫との恋やつと実りし落ち杏

佐々木重満

◆無所属

話し相手はしくて金魚太らせる

小林永以子

明易し厨に電子音さわぐ

岩楯恵津子

函嶺に抜ける新道青葉風

一ノ瀬茂代

城下にはかつて花街や栗の花

山口 千代

理事会日程

7/8 8/12 9/9

虞美人草血赤に咲くをたじろぎぬ

出澤 洋子

風薫る出窓に昭和の置時計

須田 聡子

終演の時きて色の七変化

澤口 文子

百寿ことほぎ友と語らひ握り鮎

鈴木久美子

農の娘となりて玉葱太りけり

山田 照子

信じるとは手放すことと夏めきぬ

穂坂志げる

天道虫バラライカは三角形

田畑ヒロ子

梅雨晴れや掲げし聖火迷走す

北村 文江

蛇口より初夏の音がこぼれだす

小澤 園子

野いちごやねんね赤ちゃんもらい乳

石田 和代

逃げる白鷺三島由紀夫の「金閣寺」

瀬戸 正洋

夏光して焼夷弾の夷の字かな

大石 雄介

どくだみの白十字星家に入る

大石 和子

初鰹男勝りの出刃躍る

木村美千代

亀鳴いて啜るやたまごかけごはん

小島ノブヨシ

泥団子つるつる艶の梅雨晴間

蓑宮 わか

蜘蛛の囀の真ん中嘘っぽい話

杉山あけみ

青梅の落ちてましたとインターホン

岡田 典代

◆訂正◆

646号8頁石井千代子さんの句

誤…風を受け風を紡いで豆の花
正…牡丹散る後にはひけぬ決断

足立 和子

転生の果ての綿虫かもしれぬ

尾崎 一夫

(令和3年1月号)

この句を一見して幻想の世界が広がった。綿虫は青白く光りながら雪が舞ふ様に空中を浮遊する。幼虫期は群棲し、若葉や野菜の液を吸い取り生存をはかる。その草花や野菜はやがて枯れる。草花や野菜には敵対視され人間には厭まれる。

そんな幼虫期の姿から一転、空中を雪の精の如く優雅に浮遊する姿は、最高の嬉びであり、夢の世界である。私はそんな転生の世界をこの句の中に感じ、夢を見させ、嬉ばせてくれたことに感銘した。

一ノ瀬茂代

たんぽぽや一年生の帰り道

田中 幸子

(令和3年5月号)

愛らしい景がすぐに浮かびます。一年生は少し緊張気味の朝を迎え、昼過ぎの下校になれば遊びの約束、今日の出来事など一段と大きな声が通学路に弾けます。見守る作者のやさしさが伝わってきます。

「一年生の帰り道」このフレーズだけで沢山の景と声が溢れ出てきます。季語のたんぽぽが絮となつてとんでいく様に、一年生もやがて広い世界へと羽

搏っていくのでしょうか。

久津間百合子

落ちてなほ姿崩さぬ椿かな

小宮 早苗

(令和3年4月号)

昨日まで凛と咲き誇っていた椿、そして今日そのまゝの姿を崩さないで散った。作者も今までの半生を紡ぐと、嬉しい事は基より、悲しい事、苦しい事、迷う事色々な経験をしたが、凛と対処して来た。これからも作者のイメージを崩さず輝き続けて散りたい。

自分と椿の花を重ね合わせて感銘したのであらう。私も作者の気持ちに共感した句である。

田中 恵一

耳遠き事諾へり白牡丹

鳥海 壮六

(令和3年5月号)

補聴器専門店の前を通るたびに、立ち寄ろうかなと心のゆれる自身に思い当たり、共鳴しました。遠い昔初めての配属先で、手話を習ったことを思い出しました。年を重ねるごとに、さまざまな部位に障害を發しますが、頭と身体と環境がなかなか受け入れてくれません。作者はそれをすなおに受け入れている心ばせが、下五に花王を堂々と置いて人生の清すがしさを醸成しています。

木村 幸枝

源泉の櫓の町や鳶若葉
江戸よりの水琴窟に青時雨
蜻蛉生る「モノの池」へと作り滝
漱石の泊りし宿や青葉木菟
夏鶯落合橋にバスを待つ

加藤 まり子

花すみれ小さきひみつ誰もあり
夏きざす百段坂から海望む
大寺や四方に抜ける青田風
梅雨深し改札口を抜ける猫
炎天や墓の一文歪みをり

山口 千代

カラオケの洩れ聞えけりつゆ館
バス停に踊り子号やみどり濃し
軽トラを今日の卒寿やはたた神
時の日やわたし心拍正常値
朝刊は濡れていません半夏生

石田 和代

芍薬に まぎれて迷う 悩みごと
法話好き街路樹が好き山法師
松切って手間をかけずに 庭終い
牡丹咲く 電話の邪魔を したい猫
こんこんと 湧き出る清水 命とも

中田 笑子

森深く切り株に待つ姫螢
紫陽花やペダル立ち漕ぐ男坂
餡蜜や相模浄瑠璃部活動
郭公や墨の香残る朱印帖
納豆の遅き昼餉やほととぎす

北崎 修

薫風や素焼の壺の縄模様
街路樹の大きな夕日蟬時雨
味噌蔵の裸電球黴の花
夏蝶の反り美しき能舞台
杣人の森と会話の立夏かな

川本 育子

庭下駄の鼻緒のゆるび夕薄着
石垣に光引きたる瑠璃蜥蜴
枇杷熟るる空の余白に風生まれ
もの憂しや蛍袋の仄幽き
水の声風の声聴く今年竹

須田 晴美

城跡へ続く坂道著我の花
大陸の駅に乗り継ぐ白夜かな
込み合へるモスタルの橋夏旺ん
日帰りの外湯巡りやかき氷
夏空やドライブに聴くケツメイシ

令和3年度小田原文化の日俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「文化の日」「賜」(いずれも傍題可) 各二句

一組 未発表作品に限る。

締切 令和三年九月九日(木) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250・0208 小田原市下大井二九一

田中幸子宛(☎〇四六五―三七七―〇八九二)

*作品は投句原稿とおり印刷しますので、楷書で、

大文字、小文字をはっきりとお書き下さい。

*第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選者 協会役員及び各地有力作家

賞 小田原俳句協会会長賞以下二十位、選者特選賞

第二部 俳句大会

日時 令和三年十一月三日(文化の日)

会場 小田原市民交流センター(通称UMECO)

受付 十二時 投句締切十三時

開会十三時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位

*お願い 会場では食事不可のため(飲料可)、食事を各自済ませてご参集下さい。又、時節柄マスクの着用

及び感染防止対策(会場での手指の消毒、三密回避等)にご協力下さい。

*なお新型コロナウイルスの状況によっては第二部の中止もありますことをご了承ください。その時はご連絡します。

★当協会員で令和二年四月一日から四年三月三十一日に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行いますので該当者は奮ってご投句下さい。

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

秋の吟行会のお知らせ

日時 令和三年十月十日(日)

会場 小田原フラワーガーデン 小田原市久野

三七九八―五 ☎〇四六五―三四―二八一四

受付 十三時〜十三時三〇分 当日嘱目三句を短冊にて

会費 五百円(賞品・参加費などに充当)

句会 十四時より総互選 *会場は食事不可のため、

各自吟行、食事を済ませて会場へお越し下さい。

*時節柄マスク着用、席は一つ飛ばしに、水分の補給も心掛けて下さい。

参加申込・電話又は葉書にて九月三十日までに

〒250・0854 小田原市飯田岡四八―一三三

岡本史郎宛(☎〇四六五―三八―二八二八)